

職域の卒業生評価が在校生に与えたインパクト分析

01101730 筑波技術短期大学 小池将貴 KOIKE Masayoshi

1. 聴覚障害卒業生の就労

筑波技術短期大学の聴覚部(以降、短大と略称)は、平成2年に第1期生を迎えて以来、聴覚障害(以降、聴障と略称)をもつ学生の高等教育を行ってきた。

その間、学業を修了した多くの聴障学生が企業に就職していった。彼等が職域でどのように受け入れられているのか、在校生は強い関心を抱いている。

そこで短大の就職委員会聴覚部分科会は、平成7年3月までの卒業生(第1~3期生)131名について、彼等の仕事振りがどのようなものか、職域の直属上司にアンケート調査を行い、回答の詳細及び分析結果を報告書¹⁾として公表した。

2. 就労上の注意事項

職域の直属上司へのアンケート調査では、「就労中の卒業生の仕事振りを日ごろ御覧になっていて、彼等に気を付けて欲しいと要請する点は何か。」と質問した。質問に対する多数の直属上司の回答は、報告書¹⁾では細大漏らさず記録された。聴覚部分科会長から引用の了承を得て、それらの回答を86項目の意見に集約整理した。この「職域意見集」には、先頭の「自分の意見を持ち、前向きであってほしい。」から最後の「仕事の相手は、聴障者が理解できたかいつもハラハラしている。きめ細かく報告するようにしてほしい。」に至るまで貴重な指摘に満ちている。

3. インパクト調査

この「職域意見集」は、短大の外から内に向けての社会評価であるとみなして、それを在校生がどのように受けとめるかを調べることにした。

まず、学生と教官に86項目の「職域意見集」を配布し、いずれの項目から強い衝撃(インパクト)を受け、いずれの項目はさほどでもなかったか回答してもらった。回答を依頼するに際し、在校生の対照群として教官も含めた。その理由は、在校生の「聴障」属性に対して「健聴」(教官)を対照させ、「学生」属性に対して「教官」(聴障・健聴を含む)を対照させたかったからである。

4. インパクト調査の回答者

インパクト調査の回答者は90名である。内訳は、聴障学生が52名、聴障教官が14名、健聴教官が24名である。

回答者には、「職域意見集」の86項目の各々について「インパクトを受けた」と思った項目には○印を付け、それほどでもない場合には無理に○印を付けなくても良かった。

5. データ行列

こうして、90行86列のデータ行列が得られた。データ行列の表側の標本は、前段52行が学生、中間14行が聴障教官、後段24行が健聴教官である。表頭の変量は、「職域意見集」の意見86列からなる。その交差した位置に、標本(インパクト調査回答者)の変量(職域意見)への反応{○印、無印}に応じて、それぞれ1または0が入力されている。

6. 外部情報

主データ(データ行列)の分析を行うに先立って、付加的情報(外部情報)も用意した。すなわち、学生・聴障教官・健聴教官という回答者の属性を標本外部情報として取上げた。また、努力項目・無力項目という職域意見の属性を変量外部情報として取上げた。

実はインパクト調査において一部教官から「86項目の職域意見は、就労卒業生が努力によって克服できる項目と、聴覚障害者としてはどうしてもならない項目とに大別できる。」というコメントが提示された。例えば、努力項目としては、「理解できなければ、納得いくまで尋ねてほしい。」「発声訓練はしっかりやってほしい。」などである。無力項目としては、「一対一の会話は筆談で補えるが、集団研修や会議では情報補償が困難である。」「会社や技術を説明するVTRに字幕が付いていないので情報伝達が心配だ。」などである。

7. データ行列の解析

7.1 探索的データ解析による仮説設定
データ行列にまず通常の数量化Ⅲ類を適用してみた。結果を図1と図2に示す。

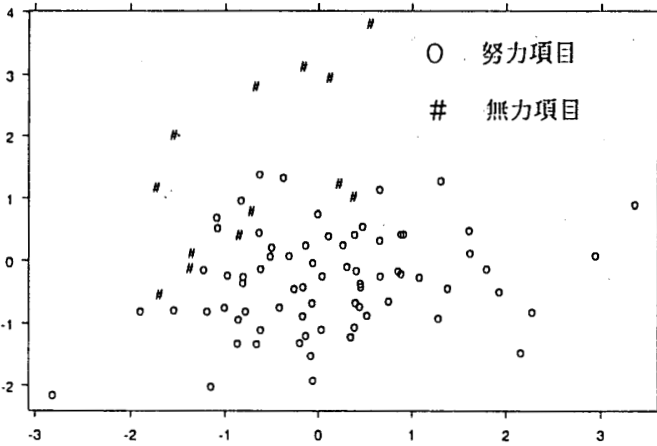


図 1. 職域意見の構造図

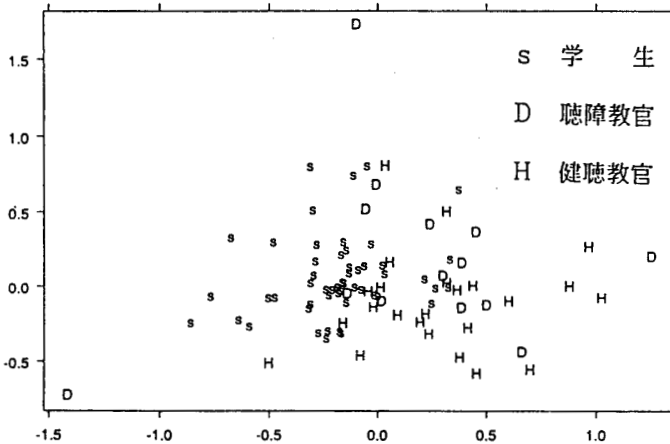


図 2: インパクト調査回答者の構造図

図 1 と図 2 は、それぞれ、左上と右下の 2 領域に分断されたと見て取れる。すなわち、無力項目と学生とが左上同士で対応し、努力項目と教官とが右下同士で対応している。ただし、聴障教官は聴障属性と教官属性とを併せもつため両方の領域に散在している。

さらに、先の“6. 外部情報”で用意した制約条件を付加した制約つき数量化Ⅲ類²⁾を適用した。その結果、因子負荷量において努力項目と無力項目とが正負に位置づけられた。そして、主成分得点において、健聴教官と学生とが正負に位置づけられ、聴障教官が原点に位置づけられた。これは、通常の数量化Ⅲ類の結果を補強するものである。

以上の探索的データ解析結果から、「無力項目と学生とが対応し、努力項目と教官とが対応する。ただし、聴障教官は双方に散らばる。」という仮説を得た。

7.2 仮説検証

次に、この仮説を対立仮説とした統計的検定を行う。そのために、インパクト

調査回答者の職域意見に対するインパクト反応延べ件数の分割表を元のデータ行列に戻って計算した(表 1 参照)。

表 1: 回答者と意見の分割表

回答者/意見	努力項目	無力項目
学生	1423	267
聴障教官	276	44
健聴教官	790	87

表 1 に分割表の検定を施したところ、検定統計量が 16.78839 であった。他方、自由度 2 のカイ二乗分布の 5% 有意水準値が 5.99146 なので回答者と意見とが独立であるという帰無仮説は棄却され、対立仮説が受容された。もしも独立ならば、表 2 のようになるはずである。

表 2: 独立な場合の理想データ

回答 / 意見	努力項目	無力項目
学生	1457	233
聴障教官	276	44
健聴教官	756	121

8. 結論

職域の卒業生評価を受け止めたインパクト調査により、「在校生は、聴覚障害者としてはどうにもならない職域の環境条件に対して敏感に反応し、逆に教官は職域の努力要請条項に敏感に反応する。ただし、聴障教官は、教官としての立場にあると共に聴障学生の立場も分かるので学生サイドにより近づく者も散見される。」という知見が得られた。

9. 今後の展開

データ行列から更に知見を得るために次のような分析を続行中である。

- (1) 学生・聴障教官・健聴教官毎にインパクトを受けた職域意見のベスト 5 を抽出し、特質をまとめる。
- (2) 学生 52 名は更に、入学直後 21 名、卒業直前 11 名、およびその中間 20 名に細分することができるので、それぞれの特質を制約つき数量化Ⅲ類により引き出す。
- (3) 制約つき数量化Ⅲ類により外部情報の影響を排除して、職域意見の潜在構造を浮き彫りにする。

10. 参考文献

- 1) 川口博(1996)聴覚部卒業生の就労状況一職域の指導者に対するアンケート調査結果一、筑波技術短期大学就職委員会聴覚部分科会。
- 2) 高根芳雄(1992)制約付き主成分分析法について、行動計量学会、19(1)、29-39。